

蜃気楼

——或は「続海のほとり」——

芥川龍之介

青空文庫

或秋の午頃ひるごころ、僕は東京から遊びに来た大学生のK君と一しよに蜃気楼しんきろうを見に出かけ
て行った。鵜沼くげぬまの海岸に蜃気楼の見えることは誰たれでももう知っているであろう。現に僕
の家の女中うちなどは逆まに舟の映つたのを見、「この間の新聞に出ていた写真とそっくりで
すよ。」などと感心していた。

僕等は東家あずまやの横を曲り、次手ついでにO君も誘うことにした。不相変あいかわらず赤シャツを着たO君
は午飯ひるめしの支度でもしていたのか、垣越しに見える井戸端にせつせとポンプを動かしてい
た。僕は秦皮樹とねりこのステッキを挙げ、O君にちよつと合図をした。

「そつちから上つて下さい。——やあ、君も来ていたのか？」

O君は僕がK君と一しよに遊びに来たものと思つたらしかつた。

「僕等は蜃気楼を見に出て来たんだよ。君も一しよに行かないか？」

「蜃気楼か？ ——」

O君は急に笑い出した。

「どうもこの頃は蜃気楼ばやりだな。」

五分ばかりたった後、僕等はもうO君と一しよに砂の深い路みちを歩いて行った。路の左は砂原だった。そこに牛車うしぐるまの轍わだちが二すじ、黒ぐろと斜めに通っていた。僕はこの深い轍わだちに何か圧迫に近いものを感じた。逞たくましい天才の仕事の痕あと、——そんな気も迫って来ないのではなかった。

「まだ僕は健全じゃないね。ああ云う車の痕を見てさえ、妙に参ってしまうんだから。」
O君は眉まゆをひそめたまま、何とも僕の言葉に答えなかった。が、僕の心もちはO君にははつきり通じたらしかった。

そのうちに僕等は松の間を、——疎まばらに低い松の間を通り、引地川ひきじがわの岸を歩いて行った。海は広い砂浜の向うに深い藍色あいいろに晴れ渡っていた。が、絵の島は家々や樹木も何か憂鬱ゆううつに曇っていた。

「新時代ですね？」

K君の言葉は唐突だった。のみならず微笑を含んでいた。新時代？——しかも僕は咄と嗟つさの間にK君の「新時代」を発見した。それは砂止めの笹垣ささがきを後ろに海を眺めている男女だった。尤も薄もつといインバネスに中折帽をかぶった男は新時代と呼ぶには当らなかつた。

しかし女の断髪は勿論、パラソルや踵の低い靴さえ確に新時代に出来上っていた。

「幸福らしいね。」

「君なんぞは羨しい仲間だろう。」

○君はK君をからかったりした。

蜃気楼の見える場所は彼等から一町ほど隔っていた。僕等はいずれも腹這いになり、陽炎の立つた砂浜を川越しに透かして眺めたりした。砂浜の上には青いものが一すじ、リボンほどの幅にゆらめいていた。それはどうしても海の色が陽炎に映っているらしかったが、その外には砂浜にある船の影も何も見えなかった。

「あれを蜃気楼と云うんですかね？」

K君は顫を砂だらけにしたなり、失望したようにこう言っていた。そこへどこから鴉が一羽、二三町隔った砂浜の上を、藍色にゆらめいたものの上をかすめ、更に又向うへ舞い下った。と同時に鴉の影はその陽炎の帯の上へちらりと逆まに映って行つた。

「これでもきようは上等の部だな。」

僕等は○君の言葉と一しよに砂の上から立ち上った。するといつか僕等の前には僕等の残して来た「新時代」が二人、こちらへ向いて歩いてきた。

僕はちよつとびつくりし、僕等の後ろをふり返つた。しかし彼等は不相変一町ほど向うの笹垣ささがきを後ろに何か話しているらしかった。僕等は、——殊にO君は拍子抜けのしたように笑い出した。

「この方が反つて蜃気楼じゃないか？」

僕等の前にいる「新時代」は勿論もちろん彼等とは別人だった。が、女の断髪や男の中折帽をかぶつた姿は彼等と殆どほとんど変らなかつた。

「僕は何だか気味が悪かつた。」

「僕もいつの間に来たのかと思ひましたよ。」

僕等はこんなことを話しながら、今度は引地川ひきしがわの岸に沿わずに低い砂山を越えて行つた。砂山は砂止めの笹垣さその裾すそにやはり低い松を黄ばませていた。O君はそこを通る時に「どっこいしょ」と云うように腰をかがめ、砂の上の何かを拾い上げた。それは瀝青チヤンらしい黒棒の中に横文字を並べた木札だった。

「何だい、それぢや。 Sr. H. Tsuji …… Unua …… Aprilo …… Jaro …… 1906 ……」

「何かしやう？ dua …… Majesta …… ですか？ 1926としてありますね。」

「これは、ほれ、水葬した死骸しかいについていたんじゃないか？」

○君はこう云う推測を下した。

「だって死骸を水葬する時には帆布か何かで包むだけだろう？」

「だからそれへこの札をつけてさ。——ほれ、ここに釘くぎが打ってある。これはもとは十じゅう字架じかの形をしていたんだな。」

僕等はもうその時には別荘らしい篠垣しのがきや松林の間を歩いていた。木札はどうも○君の推測に近いものらしかった。僕は又何か日の光の中に感じる筈はずのない無気味さを感じた。

「縁起でもないものを拾ったな。」

「何、僕はマスコットにするよ。……しかし1906から1926とすると、二十位はたちで死んだんだな。二十位と——」

「男ですかしら？ 女ですかしら？」

「さあね。……しかし兎とに角かくこの人は混血児あいのこだったかも知れないね。」

僕はK君に返事をしながら、船の中に死んで行った混血児の青年を想像した。彼は僕の想像によれば、日本人の母のある筈はずだった。

「蜃気楼か。」

○君はまっ直すくに前を見たまま、急にこう独り語を言った。それは或は何げなしに言った

言葉かも知れなかった。が、僕の心もちには何か幽かに触れるものだった。

「ちよつと紅茶でも飲んで行くかな。」

僕等はいつか家の多い本通りの角に佇んでいた。家の多い？——しかし砂の乾いた道には殆ど人通りは見えなかった。

「K君はどうするの？」

「僕はどうでも、……………」

そこへ真白い犬が一匹、向うからぼんやり尾を垂れて来た。

二

K君の東京へ帰った後、僕は又O君や妻と一しよに引地川の橋を渡って行った。今度は午後の七時頃、——夕飯をすませたばかりだった。

その晩は星も見えなかった。僕等は余り話もせず人げのない砂浜を歩いて行った。砂浜には引地川の川口のあたりに火かげが一つ動いていた。それは沖へ漁に行った船の目じるしになるものらしかった。

浪なみの音は勿論絶えなかつた。が、浪打ち際へ近づくとつれ、だんだん磯臭さも強まり出した。それは海そのものよりも僕等の足もとに打ち上げられた海艸うみくさや汐木しおぎの匂においらしかつた。僕はなぜかこの匂を鼻の外にも皮膚の上にも感じた。

僕等は暫しばらく浪打ち際に立ち、浪がしらの仄ほのめくのを眺めていた。海はどこを見てもまつ暗だった。僕は彼かれは是これ十年前ぜん、上総かずさの或海岸に滞在していたことを思い出した。同時に又そこに一しよにいた或友だちのことを思い出した。彼は彼自身の勉強の外にも「芋粥いもがゆ」と云う僕の短篇の校正刷を読んでくれたりした。……

そのうちにいつかO君は浪打ち際にしやがんだまま、一本のマッチをともしていた。

「何をしているの？」

「何つてことはないけれど、……ちよつとこう火をつけただけでも、いろんなものが見えるでしょう？」

O君は肩越しに僕等を見上げ、半ばは妻に話しかけたりした。成程一本のマッチの火は海松みるふさや心太艸てんぐさの散らかった中にさまざまの貝殻を照らし出していた。O君はその火が消えてしまうと、又新たにマッチを摺すり、そろそろ浪打ち際を歩いて行った。

「やあ、気味が悪いなあ。土左衛門の足かと思つた。」

それは半ば砂に埋まった遊泳靴の片っぽだった。そこには又海艸の中に大きい海綿もころがっていた。しかしその火も消えてしまうと、あたりは前よりも暗くなってしまう。「昼間ほどの獲物はなかった訣だね。」

「獲物？ ああ、あの札か？ あんなものはさらにありはしない。」

僕等は絶え間ない浪の音を後に広い砂浜を引き返すことにした。僕等の足は砂の外にも時々海艸を踏んだりした。

「ここいらにもいろんなものがあるんだろうなあ。」

「もう一度マツチをつけて見ようか？」

「好いよ。……おや、鈴の音がするね。」

僕はちよつと耳を澄ました。それはこの頃の僕に多い錯覚かと思つた為だった。が、実際鈴の音はどこかにしているのに違いなかった。僕はもう一度〇君にも聞えるかどうか尋ねようとした。すると二三歩遅れていた妻は笑い声に僕等へ話しかけた。

「あたしの木履の鈴が鳴るでしょう。——」

しかし妻は振り返らずとも、草履をはいているのに違いなかった。

「あたしは今夜は子供になつて木履をはいて歩いているんです。」

「奥さんの袂たもとの中で鳴っているんだから、——ああ、Ｙちゃんのおもちやだよ。鈴のついたセルロイドのおもちやだよ。」

〇君もこう言つて笑い出した。そのうちに妻は僕等に追いつき、三人一列になつて歩いて行つた。僕等は妻の常談じょうだんを機会に前よりも元気に話し出した。

僕は〇君にゆうべの夢を話した。それは或文化住宅の前にトラック自動車の運転手と話をしている夢だった。僕はその夢の中にも確かにこの運転手には会つたことがあると思つていた。が、どこで会つたものは目の醒さめた後もわからなかつた。

「それがふと思ひ出して見ると、三四年前にたつた一度談話筆記に來た婦人記者なんだがね。」

「じゃ女の運転手だったの？」

「いや、勿論男なんだよ。顔だけは唯ただその人になつていているんだ。やつぱり一度見たものは頭のどこかに残つていゝのかな。」

「そうだろうなあ。顔でも印象の強いやつは、……………」

「けれども僕はその人の顔に興味も何もなかつたんだがね。それだけに反かえつて気味が悪いんだ。何だか意識の闕しきいの外にもいろんなものがあるような気がして、……………」

「つまりマツチへ火をつけて見ると、いろんなものが見えるようなものだ。」

僕はこんなことを話しながら、偶然僕等の顔だけははつきり見えるのを発見した。しかし星明りさえ見えないことは前と少しも変らなかつた。僕は又何か無気味になり、何度も空を仰いで見たりした。すると妻も気づいたと見え、まだ何とも言わないうちに僕の疑問に返事をした。

「砂のせいですね。そうでしょう？」

妻はりようそで両袖を合せるようにし、広い砂浜をふり返っていた。

「そうらしいね。」

「砂と云うやつは悪戯いたづらものだ。蜃気楼しんきろうもこいつが拵こしらえるんだから。……奥さんはまだ蜃気楼を見ないの？」

「いいえ、この間一度、——何だか青いものが見えたばかりですけれども。……」

「それだけです。きょう僕たちの見たのも。」

僕等は引地川ひきしがわの橋を渡り、東家あずまやの土手の外を歩いて行った。松は皆いつか起り出した風にこうこうと梢こずえを鳴らしていた。そこへ背の低い男が一人、足早にこちらへ来るらしかった。僕はふとこの夏見た或錯覚を思い出した。それはやはりこう云う晩にポプラアの

枝にかかった紙がヘルメット帽のように見えたのだった。が、その男は錯覚ではなかった。のみならず互に近づくにつれ、ワイシャツの胸なども見えるようになった。

「何だろう、あのネクタイ・ピンは？」

僕は小声にこう言った後、たちま忽ちピンだと思ったのは巻煙草まきたばこの火だったのを発見した。すると妻は袂たもとを銜くわえ、誰たれよりも先に忍び笑いをし出した。が、その男はわき目もふらずにさつさと僕等とすれ違つて行つた。

「じゃおやすみなさい。」

「おやすみなさいまし。」

僕等は気軽にO君に別れ、松風の音の中を歩いて行つた。その又松風の音の中には虫の声もかすかにまじっていた。

「おじいさんの金婚式はいつになるんでしょう？」

「おじいさん」と云うのは父のことだった。

「いつになるかな。……東京からバタはとどいているね？」

「バタはまだ。とどいているのはソウセエジだけ。」

そのうちに僕等は門の前へ——半開きになつた門の前へ来ていた。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第1巻」小学館

1987（昭和62）年5月1日初版第1刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第八巻」岩波書店

1978（昭和53）年3月22日発行

初出：「婦人公論 第十二年第三号」

1927（昭和2）年3月1日発行

入力：j.utiyaana

校正：かとうかおり

1999年1月24日公開

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蜃気楼

——或は「続海のほとり」——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 芥川龍之介

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>